

上皇上皇后両陛下のフィリピン御訪問－「慰霊の旅」の集大成として

NIDS コメンタリー

庄司 潤一郎 研究幹事
 第 98 号 2019 年 6 月 6 日

はじめに

上皇上皇后両陛下（当時、天皇皇后両陛下）による海外における「慰霊の旅」の最後となったのは、平成 28 年 1 月のフィリピンである。それは、国交正常化 60 周年の国際親善と慰霊を目的とした、天皇として初めての御訪問となった。

先の大戦のフィリピンにおける日本人の犠牲者数は、約 51 万 8000 人（兵士：約 49 万 8600 人）で、単一の戦域としては中国を凌駕して最大である。他方、フィリピン人の犠牲者数は、全人口の約 7% に当たる約 111 万人と言われる。

日本・フィリピン両国ともに甚大な人的被害が生じたため、戦後当初はフィリピンの日本に対する国民感情は、きわめて厳しいものがあつた。「慰霊の旅」に関して、サイパンやパラオなど、当時より現在にいたるまで対日感情が良好な国を選んで訪問されているのではといった批判もなされたが、このようにフィリピンは、サイパンやパラオとは全く状況が異なっていたのである。

そのため、ASEAN の原加盟国（5 か国）の中で唯一残された陛下の最期の御訪問国となった。当初、1 月下旬というのは、年末からのご多忙な時期の直後ということで日程的に厳しく、側近は慎重であったが、両陛下の強い決断で、御訪問は決まったと言われている¹。そこには、天皇として、ASEAN 原加盟国で唯一御訪問されていなかったフィリピンだけに、「やり残していた務めをまた一つ果たせるとのお気持ち」（側近）があつたと言われている²。

そこで、本稿では、これまでの日比両国の天皇や大統領などの言動を通して、両陛下フィリピン御訪問における「慰霊」の意義について述べてみたい。

1 昭和天皇の苦悩

－ フィリピンの厳しい対日感情 －

昭和 33 年 12 月、フィリピンのカルロス・ガルシア大統領御夫妻が、戦後フィリピンの国家元首として初めて来日した。昭和天皇は、宮中晩餐会において、「不幸な第二次世界大戦により両国の伝統的関係が一時中断されたことは、まことに遺憾な次第であります」³と述べられた。以降、昭和天皇は、フィリピンの大統領を迎えた宮中晩餐会（フェルディナンド・マルコス大統領：昭和 41 年 9 月及び同 52 年 4 月、コラソン・アキノ大統領：昭和 61 年 11 月）においては、戦争の過去に言及されることはなかった。

ただ、昭和 61 年 11 月のコラソン・アキノ大統領との会見において、フィリピンの報道官が昭和天皇は何度も謝罪したと発表し問題が生じたことがある。後藤田正晴官房長官は、事実関係を全面否定したが、一方、謝罪の事実を認めた関係者の間でも、その内容について見解が分かれている。

会見に唯一人立ち会った安倍勲式部官長は、国民全体に謝るという文脈ではなく、戦争中国会議長であった大統領の義父のベニグノ・アキノ氏の一家に対して、気の毒なことをしたとの意味であるとしている⁴。一方、通訳を務めた真崎秀樹氏は、日本軍がフィリピンの人々に迷惑をかけたことを繰り返し謝つたと述べている⁵。

『昭和天皇実録』には、以下のように記述されている⁶。

「なお、この日の御会見において、天皇が大統領に対し第二次世界大戦に関して数度にわたり謝罪をしたとする内容が、フィリピン国の報道官の談として報道されたが、日本側はこれを否定した」

一方、戦争直後のフィリピンは、日本軍による甚大な犠牲が生じたことから、対日感情は憎しみに満ちたものであった。したがって、フィリピンにおける BC 級戦犯裁判は、厳しいものであり、訴追された被告（151 人）の内 137 人（90%以上）が有罪、79 人（約 60%）が死刑を宣告された。

当時のフィリピンの週刊誌『フィリピン・フリープレス』の論説（1948 年 1 月 17 日付）は、日本を、以下のように論じていた⁷。

「日本軍による侵略、そしてそれに引く続く占領はあまりにも恐ろしいものであった。日本占領時代の三年を経て、また集団拷問や集団処刑、略奪、焼き払い、強姦を経験した後には、フィリピン人は日本人をもはや人間とみることをやめ、殺すべき相手、地球上から除去する対象として見るようになった」

先に述べたガルシア大統領も、訪日時、宮中晩餐会において、「併しながら、過般の戦争から起った去り難い痕跡が幾分残って居りまして、今なお或る精神的留保が何程か存続しておりますこともまた等しく事実であります」と、過去の問題に念を押ししたのであった。

さらに、国会における演説でも、「十二年の歳月をもってしても、あの一大惨事によって作られた傷が完全に癒え、悪意が完全に清算された、とはいえません」と述べていたのである。こうした大統領の厳しい姿勢に接した昭和天皇は、「戦のいたでをうけし外国のをさをむかゆるゆふぐれさむし」と詠んでいた⁸。

日本の新聞も、フィリピンは戦争で甚大な被害を受けたため、悪夢は今もなお生きており、「こういった国民感情は、これだけの歳月をもってしてもいやされない。すっかり生まれ変わったつもりの我々の側からみれば、これはいかにも残念なことである」と指摘されたのであった⁹。

一方、戦後直後においても憎しみから赦しへと転換する兆しは存在していた。エルピディオ・キリノ大統領は、マニラ市街戦で妻と子供 3 人を日本軍により殺害されたにもかかわらず、昭和 28 年 7 月、死刑囚 56 名を含む 105 名の戦犯全員の恩赦を行ったのである。恩赦の理由を、「私たちは憎しみや恨みの気持ち、あるいは隣人に対する否定的な精神を

永遠に持ち続けるわけにはいきません」と語っているが、この寛大な措置は、多くの日本国民に感動をもたらしたのであった¹⁰。

2 昭和37年のフィリピン御訪問

その後、徐々にフィリピンの対日感情は、憎しみから赦しへと変化していったが、さらにそれを促進し、大きな転換点となったのが、昭和 37 年 11 月の上皇皇后両陛下（当時、皇太子御夫妻）による昭和天皇の名代としてのフィリピン御訪問であった。

出発に際して、日本の新聞は、両陛下に何らの戦争責任はないとしたうえで、「公の資格においては、過去の日本が現在に残した荷を避けることはできないし、その荷は重い。・・・いま国民は、この若いご夫妻に、あかるい日比関係の将来への祈りをかけているのである」と期待感をにじませていた¹¹。

一方、「日本に対する海外の国民感情ではフィリピンがほかのどの国よりも長い間悪かった。皇太子ご夫妻も気の重いものがあるだろうと察せられる」¹²と指摘されていた。

このように、厳しい反日感情が憂慮されたが、懸念とは逆に想像以上の大歓迎を受けたのであった。沿道には、アイゼンハワー大統領やマッカーサー元帥を迎えた時と同様に、市民約 10 万人が繰り出し、現地紙は、「両国の関係は新しい世紀を迎えるであろう」（『マニラ・デイリー・ブリティン』）、「日比両国間に友好の新時代を開くに違いない」（『フィリピン・ヘラルド』）と伝えたのであった¹³。

両陛下は、「無名戦士の墓」とフィリピン独立の父であるホセ・リサールの記念碑に献花されたが、陛下は、マラカニアン宮殿の歓迎夕食会において、「このようなしあわせな関係がさきの第二次世界大戦の間、中断されたのはまことに悲しむべきことであります」¹⁴と述べられた。

また、両陛下は、現地で、戦争未亡人や戦争孤児、日本人とフィリピン人の間に生まれた児童などにお会いになられたが、戦争未亡人団体の会長は、「ご夫妻は私たちに同情してくれました。私たちは過去の戦争のことはすべてを許しています」と述べていた¹⁵。

両陛下は、のちに、戦争という過去を経験した痛みを考えると、自身がどのように迎えられるか不安であったが、大統領御夫妻はじめ多くのフィリピン国民から「温かく迎えられたことは、私どもの心に今も深く残っております」と回想している¹⁶。

御訪問を契機に、フィリピン人の日本に対する厳しい感情も徐々に変化していった。その結果、昭和 48 年 3 月、海外で最初の日本人戦没者の慰霊碑である「比島戦没者の碑」が、カリラヤに建立されたのであった。さらに、昭和 51 年 1 月、フェルディナンド・マルコス大統領は、「比島戦没者の碑」が所在する慰霊公園の開園式において、「我々は歴史の観点を広げ、寛容の心をもって我々が正当には評価し難いものをも理解できるようにしたいということです。我々は経験した苦しみをとおして寛容の心をもつことができます」¹⁷と式辞を述べていた。

また、あるフィリピン大学の教授は、1978 年、すべての日本軍将兵が残虐であったわけではなかったことを示す証言を集めた著書を刊行したが、「はじめに」において、日本軍の残忍さを認めたくえで、以下のように述べていた¹⁸。

「国民に関しては、暗い面を言い立てるよりは、よい面について語るべきだと信じている。・・・彼らの残酷な仕打ちは、激情と憎しみの頂点で起きたものだと考えれば、理解できぬものではない。そしてその影響は永久に続くものではない。時が癒すことのできない傷や苦悩はないのである。・・・いまや、フィリピン人と日本人が平和のために和解する 때가きている」

3 ベニグノ・アキノ3世大統領の訪日

— 平成 27 年 6 月 —

その後、日比両国は、戦争直後のフィリピンにおける厳しい感情を、お互いの「赦しと謝罪」の好循環によって克服、良好な関係を築き上げてきた¹⁹。

平成 27 年 6 月、来日したベニグノ・アキノ 3 世大統領は、宮中晩餐会において、「過去に経験した痛みや悲劇は、相互尊重、尊厳、連帯に根ざした関係構築に努めるといふ貴国の約束によって、癒されてまいりました」と述べた。さらに、衆参両院合同会議における演説でも、「貴国は、過去の傷を癒す

義務を果たす以上のことを成し遂げ、真に利他的な意志をもって行動しました」とまで言及したのであった。

当時、このようなフィリピンの姿勢に、同様に多大な被害を受けた中国は、驚きをもって受け止めていた。例えば、中国メディアの『新浪』は、日比首脳会談直後の 6 月 10 日に、「なぜフィリピンは第二次世界大戦における日本軍の罪を過去のものとして、咎めないのか」と題する論説を掲載していた²⁰。アキノ大統領の発言が、いかに画期的なものであったかを物語っている。

一方、対する陛下は、宮中晩餐会において以下のように述べられた。

「先の大戦においては、日米間の熾烈な戦闘が貴国の国内で行われ、この戦いにより、多くの貴国民の命が失われました。このことは私ども日本人が深い痛恨の心と共に、長く忘れてはならないことであり、とりわけ戦後 70 年を迎える本年、当時の犠牲者へ深く哀悼の意を表します」

陛下は、これまでフィリピン大統領を迎えた過去 2 度の晩餐会（平成 5 年 3 月フィデル・ラモス大統領、同 14 年 12 月グロリア・アロヨ大統領）では、戦争に言及されたことはなく、今回が初めてであった。さらに、天皇が過去の戦争に言及するのは 1 回で十分というのが慣例であったため、宮内庁内にも異論があったと言われるが、ガルシア大統領訪日時以来戦後 70 年ということで再び過去に言及したもので、「異例」のことであった²¹。

さらに、先に述べた、過去に言及したガルシア大統領に対する昭和天皇やマニラにおける陛下（当時、皇太子）のお言葉と比べた場合、具体的に踏み込んだうえで、「深い痛恨の心」と強い表現をなされたのであった。

4 平成 28 年のフィリピン御訪問

— 想起と記憶の継承 —

平成 28 年 1 月、上皇上皇后両陛下はフィリピンを御訪問されるが、東京国際空港の御出発に際して、陛下は、「中でもマニラ市街戦においては、膨大な

数に及ぶ無辜のフィリピン市民が犠牲になりました。私どもはこのことを常に心に置き、この度の訪問を果たしていきたいと思っています」と、マニラ市街戦に言及された。

マニラ市街戦への言及は、外国御訪問の際のお言葉として、特定の事件に言及したという点で「異例の内容」であった²²。

マニラ市街戦は、昭和 20 年 2 月に生じた日米両軍の戦いで、「剣（日本軍の銃剣）と炎（米軍の無差別砲撃）による恐ろしい死」²³と称され、約 10 万人の市民が犠牲になったと言われる。

戦争直後、GHQ の提供により各紙に連載された「太平洋戦争史」では、「マニラ、狂乱の殺戮」として取り上げられたが（たとえば、『朝日新聞』1945 年 12 月 14 日）、そこでは、「ここでは全滅の運命にあった日本兵の狂気の如き群は米国人であらうと比島人であらうと男、女、子供の区別なく、やたらに斬りまくりに殺害するといふ惨虐を敢てした」と記されていた。

しかし、その後歴史教科書をはじめとして取り上げられることはなかったため、現在、多くの日本人は、南京事件は知っていても、マニラ市街戦は知らないであろう。そうした中、陛下が出発に際しての御言葉として述べられた意味は大きい。すなわち、それは日本国民に向けられたものであり、マニラ市街戦を忘れてはならないと述べられたのであった。

マニラ市街戦の追悼記念碑を建立した市民団体「メモラーレ・マニラ・1945」（1995 年創設）の創始者の息子は、陛下の言及について、マニラ市街戦への関心を高める「正しい方向の第一歩」と期待を表明した²⁴。

ついで、マニラでの晩餐会において、以下のように述べられた。

「この戦争においては、貴国の国内において日米両国間の熾烈な戦闘が行われ、このことにより貴国の多くの人々が命を失い、傷つきました。このことは、私ども日本人が決して忘れてはならないことであり、この度の訪問においても、私どもはこのことを深く心に置き、旅の日々を過ごすつもりでいます」

この文言は、これまでの ASEAN 諸国への御訪問（タイ、マレーシア、インドネシア）に際しての晩餐会でのお言葉が、「先の誠に不幸な戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう平和国家として生きることを決意し、この新たな決意の上に立って、戦後一貫して東南アジア諸国との新たな友好関係を築くよう努力してきました」といった、戦後日本の平和主義の歩みを強調する未来志向であったのに比べ、趣を異にした過去に言及したものとなっていた²⁵。

両陛下の「慰霊の旅」を通して、「想起」、すなわち多くの人々が、フィリピンにおける戦争の実態を知るようになっていったのである。同様に、両陛下の御訪問を契機に、硫黄島は、総理大臣による訪問と遺骨収集事業、クリント・イーストウッド監督の映画『硫黄島からの手紙』などが公開されるなど、より広く国民の知るところとなった²⁶。また、パラオのペリリュー島も、戦後「忘れ去られた戦場」と言われ、戦史研究者を除いてほとんど知られていなかったが、漫画「ペリリューー楽園のゲルニカー」が雑誌に連載されるなど、反響を呼んでいる。

さらに、陛下は、「想起」だけではなく、「記憶の継承」、決して歴史を忘れてはならないと述べられた。フィリピン人は、しばしば「許すことはできても、忘れることはできない」と口にするが、陛下は、フィリピンが示してきた戦後の寛大さに安住するのではなく、まさに「決して忘れてはならない」と応えられたのであった。

陛下は以前より、歴史が忘れ去られることを憂慮されていた。例えば、平成 18 年 6 月、「私どもはこの歴史を決して忘れることなく、・・・戦後 60 年を経、先の大戦を経験しない人々が多くなっている今日、このことが深く心にかかっています」（シンガポール・タイ御訪問前記者会見）と述べられていたのである。

こうした両陛下の真摯に向き合う姿勢は、フィリピン国民の共感を得るであろうとしたうえで、「忘れたい。それは過去に学び、将来のあり方を探ることである」と指摘された²⁷。

一方、陛下は、平成 7 年 8 月の「慰霊の旅」の御感想において、「この戦いに連なるすべての死者の冥福を祈り」と述べられている。国籍や性格の異なる戦没者をいかに処遇するかは、いずれの国にとっても複雑な問題であるが、両陛下は、敵味方を超越した彼我すべての犠牲者に対してお心を寄せられたのである。サイパンでは、チャモロ人など現地の人々、沖縄県出身の移民、軍属として徴用され亡くなった朝鮮半島出身者の慰霊碑に、パラオでは、米軍の「米陸軍第 81 歩兵師団慰霊碑」に拝礼されたのであった。

また、フィリピンでは、フィリピン人戦没者を祀っている「無名戦士の墓」と日本人戦没者を慰霊する「比島戦没者の碑」に献花、拝礼され、マニラ市街戦を含むフィリピンの人々の犠牲に思いを寄せられたのであった。

こうした行為は、自国民の犠牲を追悼するのは自然であるが、ただそこにとどまっていたは戦争の一部しか理解できず、十分知るためには『『敵と味方』『兵士と市民』『日本人と外国人』など様々な隔てを超える視点が要る』と、すべての戦没者に思いを寄せることにより歴史を知ることの重みと評された²⁸。

5 平成 28 年のフィリピン御訪問

— 和解と感謝 —

一方、アキノ大統領は、両陛下をお迎えした晩餐会において、「こうした歴史の上に、両国は以前よりもはるかに揺るぎない関係を築いてきました。貴国は堅実で有能かつ信頼できるパートナーとして、今日まで我が国民の発展を後押ししてくださっています」と、感謝の意を表したのであった。

上皇后陛下は、上皇陛下の願いとして、「慰霊の旅」は、戦争の惨禍を語り継ぐだけでなく、「フィリピンや韓国、中国との間で、ともによい未来をつくっていくこと」が最も大切であると語っておられるが、まさに、両陛下が目指されていたのは、慰霊を通じた和解という、より深いものを意味していたのであろう²⁹。

日本の新聞も、「『戦いに連なるすべての死者の冥福を祈る』。日本の若い世代に忘れてはならない歴史を伝えてきた両陛下の『慰霊の旅』である。今またそれが諸国民との相互信頼の絆となればどんなにいいだろう」と論じていた³⁰。

日本とフィリピンの両国は、まさに、戦争という苦い過去を乗り越え、新たな協力関係を築き上げたことによって、和解のモデルを世界に示しているのではないだろうか。先に述べたアキノ大統領の来日時、両国間で出された「日比共同宣言」（平成 27 年 6 月 4 日）には、以下のように記されていた。

「この 70 年間の歴史は、ある二つの国の国民が、過去の問題を乗り越え、強固な友好関係を構築するに当たり、そのたゆみのない努力によって顕著な成果を達成し得ることを世界に示している」

例えば、シンガポールの ASEAN 研究センター (ISEAS) が、2018 年にアセアン諸国の識者に行った各国の信頼度に関する意識調査で、全体では世界の中で日本が最も信頼されており (65.9%、EU=41.3%、米国=27.3%)、フィリピンに関しては、ASEAN で第 2 位の高さ (82.7%、第 1 位は 87.5% のカンボジア) であった。このフィリピンの結果について、「戦争の記憶」は最早日比間のアキレス腱 (弱点) ではないと分析されていたのである³¹。

一方、両陛下は、フィリピン滞在中、レセプションにおいて、希望されて、先に述べたキリノ元大統領の孫娘と対面された。陛下は、「キリノ大統領が日本人に優しくしてくれたことに、日本人たちは感謝しています。このことをあなたたちに伝えることができました」と話された。孫娘は、「日本とフィリピンは過去にないほど良い関係を築いてきた」と応えた³²。

上皇后陛下は、モンテルパ刑務所に収容されていた日本人戦犯の恩赦を決断したキリノ大統領に思いを寄せつつ、以下の歌をお詠みになられている。

御歌「許し得ぬを許せし人の名と共にモンテルパを心に刻む」

さらに、同年の誕生日に際して、以下のように述べられていた。

「戦時小学生であった私にも、モンテルパという言葉は強く印象に残るものでしたが、この度の訪問を機に、戦後キリノ大統領が、筆舌に尽くし難い戦時中の自身の経験にもかかわらず、憎しみの連鎖を断ち切るために、当時モンテルパに收容されていた日本人戦犯 105 名を釈放し、家族のもとに帰した行為に、改めて思いを致しました」

恩赦から約 70 年近く経過した今、キリノ大統領による赦し、恩赦の決断に対して、両陛下は感謝の意を表されたのであった。

おわりに

以上、考察してきたように、上皇上皇后両陛下による「慰霊の旅」は、単なる「慰霊」に留まるのではなく、「想起」と「記憶の継承」、「感謝」、そして「和解」という様々な意義を有しており、それは時間的・空間的広がりを持つ奥深いものであった。

両陛下によるフィリピン御訪問は、慰霊のみならず、想起と記憶の継承及び相互の感謝を通して、さらに和解を強化したのであった。日比関係史の専門家である中野聡氏は、「比側の『忘却に対する抗議』に応える重い意味」があり、「日比間で『より質の高い和解』をめざしていくうえでも望ましい」と評価していた³³。和解が達成されるにともない、過去が忘却されつつある中、両陛下の御訪問は、想起、

すなわち、再び過去を確認することによって、より熟した両国関係を目指したものであった。

フィリピンでは、「陛下が先の大戦への深い悔悟を示したことで両国のきずなはさらに強まる」といった声が聞かれたが³⁴、フィリピン大学のリカルド・ホセ教授は、「対等な関係の構築には、負の歴史にもう一度目を向ける必要がある」との観点から、両陛下の今回の御訪問を、「日比関係の新たなステップ」と評していたのである³⁵。

戦争中日本により甚大な被害を受けたフィリピンのアキノ大統領は、両陛下がフィリピンを御訪問された晩餐会において、「両陛下にお会いして実感し、畏敬の念を抱いたのは、両陛下は生まれながらにしてこうした重荷を担い、両国の歴史に影を落とした時期に他者が下した決断の重みを背負ってこられねばならなかったということです」と述べていた。

先の大戦において甚大な被害を受けたフィリピンの大統領が、「畏敬の念」という表現で、「慰霊の旅」を続けられる両陛下を讃えたのであった。フィリピン御訪問は、まさに、両陛下による「慰霊の旅」の集大成であったと言えよう。

1 河相周夫「天皇后両陛下フィリピン随記」

『文藝春秋』2016年5月号、196頁。

2 「皇室ダイアリー No.323 比訪問 やり残した務め」『読売新聞』2015年10月25日。

3 加瀬英明編『宮中晩餐会—お言葉と答辞』日本教文社、1993年、15ページ。

4 昭和塾塾友会『回想の昭和塾』西田書店、1991年、180頁。岩見隆夫『陛下のご質問—昭和天皇と戦後政治』毎日新聞社、1992年、139—143頁。

5 真崎秀樹『側近通訳 25年 昭和天皇の思い出』読売新聞社、1992年、38—39頁。

6 宮内庁『昭和天皇実録 第18』東京書籍、2018年、408頁。

7 永井均『フィリピン BC 級戦犯裁判』講談社、2013年、69頁。

8 同上、232—233頁。

9 「余禄」『毎日新聞』1958年12月1日。

10 永井『フィリピン BC 級戦犯裁判』第4章。

11 「社説 皇太子ご夫妻の旅立ちに寄せて」『朝日新聞』1962年11月4日。

12 「天声人語」『朝日新聞』1962年11月6日。

13 『毎日新聞』1962年11月8日・11日。

14 『読売新聞』1962年11月6日。

15 『毎日新聞』1962年11月8日。

16 平成28年両陛下フィリピン御訪問時の、歓迎晩餐会における陛下とベニグノ・アキノ3世大統領の挨拶・お言葉から。

17 『集録 「ルソン」』第12号、1988年9月、54—55頁。

18 アルフォンソ・P・サントス（瓜谷みよ子訳）『フィリピン戦線の日本兵』パンリサーチ・インスティテュート、1978年、8—9頁（原題は、*PHILIPPINE—NIPPON TALES: A Collection of Incidents Showing the Sunny Side of the Japanese Occupation of the Philippines*）

National Book Store Inc. , 1978)。

- 19 戦後の日比間の和解をめぐる歴史については、中野聡「追悼の政治—戦没者慰霊をめぐる第二次世界大戦後の日本・フィリピン関係史」池端雪浦、リディア・N・ユー・ホセ編『近現代日本・フィリピン関係史』岩波書店、2004 年を参照。
- 20 <http://news.sina.com.cn/w/zg/gjzt/2015-06-10/19111128.html>
- 21 岩井克己「激戦地 3 代の縁 紡いだ友好 鎮魂と感謝」『朝日新聞』2016 年 1 月 30 日。
- 22 中野聡「天皇フィリピン訪問が意味したこと」『世界』2016 年 4 月号、29 頁。
- 23 中野聡「和解と忘却—戦争の記憶と日本・フィリピン関係」平和と和解の研究センター編『平和と和解の思想をたずねて』大月書店、2010 年、257 頁。
- 24 『朝日新聞』2016 年 1 月 31 日。
- 25 但し、華僑の殺害があったシンガポール御訪問（平成 18 年 6 月）では、「それに先立つ先の大戦に際し、貴国においても、貴い命を失い、様々な苦難を受けた人々のあったことを忘れることはで

きません」とやや踏み込んだ発言をされた。

- 26 両陛下の硫黄島御訪問については、庄司潤一郎「両陛下『慰霊の旅』の原点としての硫黄島行幸啓」『中央公論』2019 年 4 月号を参照。
- 27 「社説 両陛下の比訪問 忘れない決意新たに」『毎日新聞』2016 年 1 月 27 日。
- 28 「社説 天皇慰霊の旅 歴史を知ることの重み」『朝日新聞』2016 年 1 月 29 日。
- 29 小池政行「皇后が私に明かした『象徴の在り方』」『文藝春秋』2018 年 2 月号、145—146 頁。
- 30 「余禄」『毎日新聞』2016 年 1 月 27 日。
- 31 “Survey Report: “State of Southeast Asia: 2019,” *ASEAN FOCUS* 26(January 2019), pp.6-16, <https://www.iseas.edu.sg/articles-commentaries/aseanfocus>
- 32 『東京新聞』2016 年 1 月 30 日、『日本経済新聞』2016 年 1 月 29 日。
- 33 中野「天皇フィリピン訪問が意味したこと」29—32 頁。
- 34 『読売新聞』2016 年 1 月 31 日。
- 35 『朝日新聞』2016 年 1 月 26 日。

プロフィール

profile

研究幹事

庄司 潤一郎

専門分野：近代日本軍事・政治外交史、
歴史認識問題

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29171）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>